

## 縄文の風シンポジウム 抜粋

～今の時代を見つめなおす～

「縄文の風シンポジウム」は、『第1回里山アート展』の開催記念イベントとして開かれ、3年続きました。

第1回 平成16年(2004)11月7日 主催/佐藤賢太郎とふくろう会

第2回 平成17年(2005)11月5日 主催/コスモ夢舞台実行委員会

第3回 平成18年(2006)7月17日 主催/コスモ夢舞台実行委員会

これは、3回分のダイジェスト版です。

企画・監修 佐藤賢太郎

ダイジェスト版校正 森紘一

令和4年(2022)10月15日

NPO 法人コスモ夢舞台

## 第1回 縄文の風シンポジウム

### 第1部 なぜ、縄文シンポジウムを開催したか

佐藤賢太郎 自分の生まれた豊実には縄文の土器が出たということがきっかけでした。もし、これがなかったら縄文シンポジウムはなかったと思います。

もう少し詳しく申しますと、新渡大橋がかけられたところに縄文の遺跡が発見されました。そして橋の親柱として彫刻モニュメント制作の依頼をいただきました。そこで何を造るかと考えた時に縄文と出会いました。

日本の人口が現在、一億人余りですが、今でも豊実は過疎で人が住んでいないところに、まさか5千年前、日本全国に30万人しか住んでいなかったのに、こんな山の中に人が住んでいたなどとは考えられませんでした。

ところで、モニュメントは何をテーマに造ろうかと考えました。橋がなかった頃の地元の人々の生活をテーマに造ろうということにしました。船に乗った生活風景と、もう一つは鉄橋を渡った人の生活風景、それを彫刻にしてみようと思いました。船に乗って生活している姿を、縄文人の生活に重ねながら、ここに取り入れてみたいなと思いました。

出土した土偶には頭がなく、何とかその頭がどのようになっているのか解りたいと思って、地元の上川村の資料館に行きました。それでも解らないから、東京の国立博物館に行ったりしました。そんな時期に郡山美術館で縄文の展覧会が開催されていて見学に行きました。そこで縄文の土器・土偶に直面し驚きました。こうして調べているうちに縄文人の生活というものは現代人が失っているもの、学ぶべきところがあると思い始めました。そのことをふくろう会の数人に話したら、ものすごく関心を持ち始めて、今度は私に「この縄文の本が面白いよ」といって、どんどん縄文の本を紹介してくれました。

現代の人間社会は、日本ばかりか世界中がおかしくなっている、と誰もが感じているところです。そこで縄文文化というものを調べて、今の時代より、縄文人の方が人間らしく、生き生きと、おおらかな生活をしていたのではないかと思い始めました。縄文の人々の生き方は、21世紀を生きる我われのモデルになるのではないか、心ある学者もそう言っています。

そこで、こんな過疎の地に手弁当で夢舞台づくりに集まってきている仲間には縄文人の豊かな生き方に憧れを持っている子孫ではないか、そして夢舞台が目指している三つの心（1 感動ある人間交流 2 一人ひとりが夢を輝かせる 3 本物と向き合う）が縄文人の生き方にピッタリ符合していると思いました。そこでシンポジウムを開催してみようということになりました。

縄文時代といわれるのは1万年も続いた長い期間、日本の歴史の6分の5は

縄文時代であった。しかしこの事実はあまり大切に扱われてこなかった。そこで私は数多い考古学者の中で、国際キリスト教大学教授の小山修三さんと、小林達雄、宗左近、矢部良明さんの著書を中心にまとめてみました。

## 縄文の知識

### 1 縄文時代の区分

草創期 (BC10000) 12000 年前～10000 年前 煮炊き用の底が丸い土器がつくられ、弓矢を使う猟が始まる。

早期 (BC8000) 10000 年前～6000 年前 竪穴住居が誕生し、土器は深鉢、装飾は平面的、土偶がつくられ始める。貝塚ができる。

前期 (BC4000) 6000 年前～5000 年前 気候が暖かくなり、海が広がる。三内丸山遺跡この頃から始まる。土器の底が平らになる。共同墓地がつくられ、黒曜石やヒスイが産地から広い地域に広がっていく。瓢箪やゴボウの栽培も始まる。漆、編物などの技術が発展する。土器は装飾の立体化が進む。

中期 (BC3000) 5000 年前～4000 年前 人口が 30 万人。縄文時代のピークになり、関東、中部地方を中心に大きな村ができる。三内丸山が最も繁栄した時期。北陸では火焰土器が流行した。インダス文明発祥、エジプトのピラミッドが造られる。

後期 (BC2000) 4000 年前～3000 年前 気候が寒くなり、東日本の人口が減り始める。いろいろなアクセサリーがつくられる。精巧な注口土器、入れ墨土偶がつくられる。

晩期 (BC1000) 3000 年前～2300 年前 寒い気候がピークになる。水田のコメづくりが西日本から広がり始める。青森県で遮光土偶がつくられた。弥生人が大陸から続々渡ってくる。

### 2 縄文土器・土偶の造形にふれて

#### <土器>

作家活動をしているものとして大変恥ずかしいのですが、今年、郡山美術館の縄文土器造形展に出向き、初めて縄文のことを知ったのです。

まず感じましたのは、縄文中期の火焰土器のようなものがなぜつくられたのか、どうしてこんな造形をつくれたのかという疑問と驚きでした。現代の感覚で実用的な面で言ったら不便でしょうがない、むしろ弥生式土器のほうが機能的で使いやすい。

しかし、郡山美術館の縄文図録のなかで縄文中期に見られる造形は自由奔放、思い切りのよい創作エネルギーを発散している、「畏怖の念」を促す造形物でした。

そして縄文の世界に暮らしていた人たちは、鍋に特別な力を感じていたよう

です。鍋が持つ特別な力とは、生命が宿っている動植物を食べ物に変える力。食べ物にするには生命を断つ必要があるけれど、食材が感じていたかもしれない痛みや恐れ、そして人間に対する悪しき思いなどが、鍋で煮込むと消えるという力。つまり今の人間より真剣に生きていた。他の生き物に対して畏敬の念があったと解説されていました。だから、あのような造形が生まれたのもうなずけます。これこそが実用であります。

#### <土偶>

彫刻家として最も関心のある造形物です。郡山美術館で見た4点の土偶に驚きました。現代の垢ぬけた前衛的アートがあり、どっしりとした女性像あり。これまたどうしてこんな造形がくれたのか、関心を抱かずにおれませんでした。そして、なぜ土偶をつくったのかも大変興味深いものです。私はそれを知りたくて、本の写真を頼りに30点くらいテラコッタ、粘土でそのコピーを作りました。

小林達雄さんの言葉を借りますと、土偶は第二の道具とっています。手で使う鉋やナイフを第一の道具とすれば、第二の道具は心の中で使われるものであると言っています。例えば足が痛い人は、自分の足の痛いところと同じ土偶の足を折って祈るとか、現代人にはバカバカしいと思われるかもしれませんが。しかし、こういう考え方は私たちの心のどこかにあります。今では見られなくなりましたが小さいころ、塞ノ神様とか屋敷の木々に注連縄を張ったりしていました。

ただ今の人間は、目に見えるものしか信じなくなりました。信じられるのは有名であるとか、肩書があるとか、物理的評価ができるもののみ。この信仰心が一番大きいのではないのでしょうか。目に見えない信仰心に偏見を持たれるが、あなたの信仰心とは何かと問われたら、物理的に見えるものしか信じない、それは新興宗教信仰ではないかと言いたい。

### 3 縄文人はどんな生活をしていたか？

#### <食>

縄文時代の食生活は、意外なほど弥生時代より豊かであったというのが定説です。それどころか、現代の食生活にも匹敵する栄養バランスの取れた食生活であった。しかもドングリなどの木の実だったために食料を獲得するための時間が短く済み、現代人より自由な時間をはるかに持つことができたと思像されています。メニューは土器を使って煮込み料理が中心。食材はサケやアユといった小魚、小動物をはじめ、山菜、酒づくり、山椒香辛料、甘味蜂蜜。ヘルシーでバランス抜群の、理想的な食卓であった。2000年前先祖はこの生活を捨て、働きずくめの生活を選んでしまった。

#### <顔かたち、ファッション>

顔立ちはホリが深い。弥生人が入り込んできて南北に分断、混血の進む中で北海道のアイヌ人、沖縄の人が縄文人の子孫として、その特徴を色濃く残していると言われている。縄文人は裸同然、衣装としたら毛皮を腰に巻き付けている程度という認識だったら大きな間違いです。毛皮のVネック、貫頭衣を基本にパンツ、手甲脚絆のようなものまであった。腕輪、首飾り、耳飾り、入れ墨など飾りこみの美が主流だった。

#### <建築物>

縄文といえば竪穴式住居が有名ですが、その住居は季節限定の家屋ではないかといわれている。竪穴式住居は一年通じて暮らせるものではない、蒸し暑く煙たくて一年中暮らせない、冬だけの家屋ではないか。

三内丸山は35ha、500人以上が住んでいたと想定されています。ものすごい規模です。神殿都市ではなかったか。土器は年間で千個以上の容器がつかわれていた、計画的な生産が行われていたと考えざるを得ない。漆器、織物、宝石などが埋まっています。一地方の集落ではなく古代都市、様々な情報が集まる文明発祥の地だったかもしれない。大型竪穴家屋は、ショッピングモール、レストラン。有名な6本柱の太さは2.2m、深さ2m、予想高さ17mの建物は神事を行う神殿ではなかったか。

#### <流通と経済>

縄文人たちは、孤立した小さな集落で、自給自足のつましい生活をしていただけではありません。それどころか海路を利用して、広範囲な交易ネットワークを構成していた。

例えば三内丸山遺跡からは、翡翠、琥珀、黒曜石といった三内丸山では産出しないものが多数出土しています。瓢箪やゴボウなど、明らかに海を渡ってきたものがあります。また、大量の土器出土は職人たちによる土器の大量生産が行われた可能性がある。翡翠の珠は縄文の貨幣だったのではないか。

#### <病気と健康>

平均寿命は30歳。縄文時代には何らかの治療が行われていたことが分かっています。また破壊されていた土偶などから、呪術的な治療も垣間見られます。縄文人は薬物療法、物理的治療法、科学と精神の両面から、人体に様々な治療を施していた。注目すべきことに、先天性異常がみられる骨でも、立派に成人した例があること。このことは、厳しい生活の中でも、障害者を介護し、助けていく余裕と優しさがあつたことを物語っています。

病気に対する考え方や治療法は、その文化によってずいぶん違ってくるものです。超自然的な力によって病や死から引き戻されるという考え方は、現代でも一般の人々に残っています。

今日の日本は西洋医学が中心で、病気の原因を突き止め、それを投薬や手術

によって取り除く方法をとります。そこには人体を機械としてとらえ、不調の原因となるパーツを、直したり取り替えたりする思想なのです。明治以前の日本人は人体をいわば一つの宇宙としてとらえ、そのシステムが円滑に動くように調整するという思想に基づいています。縄文人の考え方は、この思想に近かったと思われます。

#### <精神生活>

縄文人は祖先崇拜、魂の存在を信じ、死者を手厚く葬っていました。また、すべてのものに魂が宿るというアニミズム思想を持っていたとも考えられています。今よりも自然に近く、精神世界と強い結びつきを縄文人は持っていた。

人間だけでなく、自然の動物や植物、山、川、太陽や月、星座、風や稲妻、さらに生活道具類にまで魂が宿っている。目に見える物体を目に見ることのできない魂が動かしている。このアニミズムでは、人々は魂と物体の二つの世界に親しみ、調和しながら暮らしていると考えます。そんな中で魂と交流し、その力をコントロールする霊能力を持ったシャーマンという存在があります。縄文時代はアニミズムを根底に置いた、かなり呪術的な時代ではなかったか。

魂の観念については、人は身体と魂が結合したもので、魂が肉体から離れた時が死になります。魂は滅びないで再生する。だから人間は永遠に死ぬことがない、という考えです。

縄文時代の埋葬は心を込めて丁寧に行われていた。人間ばかりか生きるものすべての死を重んじていたようです。

### 4 縄文人の知恵に学ぶ

縄文人は野蛮な人間たちとの認識は全くの誤解で、むしろ現代人より精神的に豊かな生き方をしていた。そして、現代人よりはるかに生と死の意味を考えていた。その上で、現代人が失った心、縄文の知恵に学ぶことは次の3点ではないかと思います。

- 1 争いのない生活が1万年続いた
- 2 必要な分だけ自然の恵みをいただく生き方
- 3 すべてに魂が存在する観念に生きていた

## 第2部 パネルディスカッション

佐藤賢太郎 第1部は知識として縄文を知ることでしたが、第2部は応用編として3人のパネラーに、縄文への考え方、感じ方、自分の生活と豊実における夢舞台つくりにつなげて、聞いてみたいと思います。

### 1 なぜ縄文に関心を持ったか

森英夫 なぜ関心を持ったかという、佐藤さんが郡山の美術館で火焰土器を見てきて「すごいよ！」と言われたからです。火焰土器は新潟県や東北地方に

しかないんですね。そこから興味が湧きました。

**御沓一敏** この豊実に縄文土器が出たところから自分は狂い始めました。縄文の三仙人といわれる岡本太郎さん、梅原猛さん、宗左近さんの本を読みました。特に宗左近さんの本を読んで、イメージが膨らんでいきました。それがきっかけです。

**森紘一** 私も豊実に来るようになって、縄文土器が発掘されたというのが大きいのですが、本を読んでいく内に、自然と共生している縄文人の生き方は、我々に必要なこれからの生き方に通じるのではないかと思い、魅かれました。

## 2 どこに縄文の魅力があるのか

**佐藤賢太郎** ありがとうございます。パネラーの紹介をさせていただきます。森英夫さんは高校の教師（浦和在住）、御沓さんはコンピューターソフトの制作会社（三郷在住）、森紘一さんは出版関連会社で（横浜在住）、3人ともふくろう会の会員です。それでは、どこに縄文の魅力があるのか、森紘一さんからどうぞ。

**森紘一** まず何よりも本物を見たいと思ひまして、最初に蓼科に近い茅野の尖石（とがりいし）縄文考古館に行きました。縄文のビーナスといわれている日本最古の土偶を見てきました。17cmぐらいの小ぶりな土偶ですが、この前に行きますと何かゆったりとした幸せな気分になりました。これは5千年ぐらい前のもので、八ヶ岳山麓で発掘されたと聞いております。5千年という時空が飛んで、今の作品として温かみを感じてしまいます。本物を見ることは大事だなと思いました。また、十日町市の博物館には50点ほど火焰土器が並んでいますが、その中に王冠のような雪炎（ゆきほむら）がありました。こうした本物のつくられ方、アート感覚に衝撃を受けました。当時の縄文人が作品に込めた祈りとか、あるいは願いとか、そういう精神世界の素晴らしさに圧倒されまして、縄文にのめり込んでいきました。

**御沓一敏** 私は考古学者の中では長岡市出身の国学院大学教授の小林達雄さんが面白いと思っています。小林達雄さんは「縄文は文化であり、文明ではない。生き方、暮らし方そのもの。対して、文明は技術と効率である」といっています。コンピューターのソフトウェアを作っている会社にいる自分は、まさにその真只中にいるわけです。「こりゃまずいよ」ということで、皆さんと一緒に夢を追いながら、縄文人の生き方と同じようになればいいなと実践で学ぼうと感じています。

**森英夫** 私たちの学んできた歴史の時代区分は、例えば江戸時代で270年、平安だって90年弱、1000年単位で同じ名前の時代区分はありません。それが縄文は10000年です。それだけでも、もの凄いことだと思いました。

ひょっとしたら、縄文時代は原始共産制の理想郷で、エデンの園だったのではないか、だから1万年続いたのではないかという感じがして、そこに縄文時代の

魅力を感じました。

### 3 夢舞台つくりと縄文の生き方

佐藤賢太郎 ありがとうございます。別に給料を貰うわけでもないのに、皆さんはコスモ夢舞台つくりに一生懸命汗を流し、語り合うことを喜びとしています。そこに縄文人の生き方との共通点はありますか？

森紘一 ちょっとこじつけになりますが、私はふくろう会に入ってまだ2年ですが、一番の喜びは手づくりと共同作業です。この天井の竹張りも壁のタイル貼りも、真っすぐではない、ゆがんでいます。これが私たちの作品です。一つの共通する目的をもって、夢をもって、手づくりで共同作業をしていくこと、それが縄文につながる道ではないかという気がします。

それとですね、ここを「和彩館」と呼んでいます。食事処であり、休憩所にもなっています。ここでは店主のマキ子さんが、食材から料理方法、器も含め本物を求めて、丹精を込めています。ぜひご当地の皆さんも、この共同作業に、この賄いに参加していただきたいと思います。そういう中で、新しい喜びを見つけていただきたいのです。きっと縄文人たちも日常的に、そういう共同作業をやっていたのではないかと思います。

御沓一敏 バブル絶頂期に大型ホテルと旅行会社がタイアップして、団体で移動した旅行ブームは終わり、静かな観光旅行に流れは変わりました。それにしてもやはり、グルメとか温泉は主流であります。かつて観光の語源は「光を見る」ということだと聞いたことがあります。私は光とは本物だと思います。本物を見ることが観光だとすると、豊実にはいっぱい本物が集まっています。アートから農業まで受け入れ口の広いのがコスモ夢舞台です。

私は九州の大分県、3千人くらいの過疎の温泉町に生まれました。今は炭酸の含有量日本一ということでもかなり有名になりました。よく友達から帰って来いよといわれますが、こっちにしようと思っています。なぜかという、やはり縄文の素晴しさなんです。自分たちの理想郷、夢舞台であるここで本物を目指したいと思っています。

森英夫 少ない知識と自分の感覚でいうと、夢舞台を作っているふくろう会と縄文人が同じかどうか分かりません。佐藤賢太郎を中心としたフクロウ会は、三角形の頂点に、例えばシャーマンとしての佐藤賢太郎がいるというわけではありません。それぞれの役割分担をそれぞれが尊重し合っています。

縄文人もまた、土器を作る人、狩猟をする人とか、役割がはっきりと分割されていたわけではないようです。支配者、被支配者という関係はなく、みんな平等に輝いていた集団だったと思います。そういう意味で、縄文人の中に我われが今、失っているものを見ることができないのではないかと思います。



#### 4 各自の持論

佐藤賢太郎 それでは最後に、「縄文とまちおこし」、「縄文から定年後の生活を考える」、「縄文は元気になる」をテーマに、それぞれの生活感からくる持論を話していただきます。

##### ① 縄文とまちおこし

森英夫 それでは、私なりの考えを述べさせていただきます。政治家の言う「まちおこし」とか「地方の時代」と違い、私たちは行政からお金を貰っているのではなく、私たちの身体だけで、みんなが意気を感じてやってきました。何を言いたいかというと、行政からお金を貰って、いくらあるからやろうというのは町おこしでも村お越しでも何でもないとわけですよ。自分たちが意気を感じてやるのが町おこし、村おこしだと思うのです。

原点は阿賀野川の支流、馬取川の素晴らしい風景にありました。佐藤さんは歩きながら、ここに「ふくろう会」の仲間と東屋を建て、いろりを囲んで、酒を飲みながら、人生を語り合えたらいいな、と思ったそうです。ひょっこりと思ったことが実現して「悠々亭」という凄いモノが建ったわけです。私、感動しました。思ったことが、その気になると出来ちゃうんです。ひょっとしたら、そのエネルギーが「まちおこし」「むらおこし」につながるのではないかと考えています。

縄文人は、水耕、稲作はありませんからドングリや川の鮭など身近もので自分たちの生活をしてきたし、喜んでいました。実は、個人が足元で素朴に生きていく、生活していくことが、集落としては、それが「むらおこし」であり「まちおこし」だったのだと思います。縄文人はまさしく、それをやっていたと思います。これこそが「縄文のまちおこし」ではないかと私は思います。

##### ② 縄文から定年後の生活を考える

森紘一 私は横浜で生まれ、横浜で育ったハマッ子です。言ってみれば、地方に故郷を持たない不幸な都会人のひとりというわけです。それはさておき、私もすでに還暦を過ぎているのですが、私の周りに定年退職者が増えています。高齢化社会ですから、当然人口比率で増えるわけですが、最近こんな話もあります。無事会社を勤め上げまして、退職金を奥様に感謝を込めて渡したところ、奥様からは離縁状を渡されてしまった。嘘のような本当の話もあるもんですね。

最近東京では、大手企業のカルチャーセンターや大学の市民公開講座という、第二の人生を豊かにお過ごしくださいといったスクールがジジ・ババで混んでいるそうです。

そんな時、佐藤賢太郎さんを御沓さんに紹介されました。細かいことは忘れましたが、「自分には才能がない。けどやりたいことはいっぱいある」というようなことを佐藤さんに訴えたんだと思います。「創作活動というのは、できる時にできるところから始めて、完成しなくてもいいんだよ。人生は一回だけだから

後悔しますよ」と言われました。ご本人は覚えているかどうか分かりませんが、その一言で二足の草鞋を履くことに決めました。そうした経緯からふくろう会に入り、豊実の大自然を知って、ある種の目覚めが生まれました。企業間の競争、勝ち負け合戦から、少しゆっくとスローライフを楽しもうと思いました。別に縄文が理由で会社を捨てたわけではありませんが、定年後の生活を考えるとき、この豊実の夢舞台が上手くはまってくれたということなんです。

### ③ 縄文は元気になる

**御沓一敏** 私は昭和41年に大学を卒業しました。ちょうど学校は大学紛争、就職すると労使間の争いと続きます。私はなぜ、同じ組織で学ぶ者や働く者同士が喧嘩しなくてはいけないんだろうと思いました。佐藤さんと出会ったのは8年ほど前でしょうか。佐藤さんもあのパワーで間違いを正すものですから、受け入れられないことがありました。その点で意気投合したわけですが、正論を吐くのは難しいなとつくづく感じたものです。

「動いてこそ感動はやってくる」は佐藤さんの口癖ですが、私もやはりここで寒さを感じるなか、汗をかいてみて、地元の人を含めて感動だらけなんです。元気になるんです。しかし、行動するときの基準はつくろうよということで、三つ考えました。「感動ある人間交流」をしよう、「ひとりひとりが夢を輝かせよう」、そして三つ目が「光、本物と向き合う」です。最後に、1879年にノーベル賞をとったアインシュタイン博士が日本に残された言葉があるので読ませていただきます。「世界の未来は進むだけ進み、その間、幾度か争いは繰り返され、最後の戦いに疲れ果てる時が来る。人類は真の平和を求めて世界的な盟主をあげねばならぬ。この世界の盟主たらん者は、武力や金力ではなく、あらゆる国の歴史を抜き超えた、最も古くまた、最も尊い家柄でなくてはならない。世界の文化はアジアに始まってアジアに帰る。それはアジアの最高峰日本に立ち戻らなければならぬということだ。我われは神に感謝する。我われに日本という尊い国を創っておいてくれたことを」とあります。私、感動しました。元気になります。だが、果たして日本が今、こんな国かどうか、恥ずかしくて何も言えない。

しかし、アインシュタインは、縄文につながる日本人を見て、生活を見て感じたのだと思うんです。小さくても良いから、豊実の地でそういう形がくれたら良いなと思っています。日本の基層文化である「縄文」の伏流水は今も流れていて、夢舞台と一体となって豊実に湧き出していると言いたいのです。

## 第3部 参加者の声

あまり時間もありませんが、第3部ということで、会場の皆様のご感想をいただきたいと思います。

・日本石材工業新聞社 内藤様 この夏、佐藤さんからお話を伺いまして、石と

は全く関係のないこの豊実には、なぜ石彫作家が夢舞台をつくっているのか、そこにふくろう会の皆さんがいらっしゃる。これはどうゆう関係だろうと思ったわけです。しかもパネラーの皆さんがお話しされたように、それぞれ意気投合されている。私たちの世界は、産業革命の組織化時代から、もう少し時間がたって、環境の時代へ変わっていく時代なんですね。そのちょうど不安定な時期に多くの団塊世代がさしかかっているわけです。そこに、佐藤さんが模索されているいろいろな意味があるだろうと思います。「縄文の風シンポジウム」には、それぞれ意見が与えると思いますが、第一回目にしては、少し糸口が見えてきたのではないのでしょうか。ここに新しい文化が花咲く日を、ぜひ私も期待したいと思います。ありがとうございました。

・**県議会議員 澤野様** この豊実というところは、新潟県と福島県の県境、明治19年にここは新潟県になりました。豊実は要するに、会津の出入り口ですので、私は新潟や新津の人と話をするときには、東蒲原は上流社会です。文化も上流、人間も上流、英語でいうとハイソサエティなんだと話をします。きょうの「縄文の風シンポジウム」のようなものが続けば、この地はもっと豊かになって、皆さんの求めている心豊かな生き方につながると思います。その中で、私も私なりの情報発信を続けていきたいと考えています。ここは上流社会ですから。ありがとうございました。

・**若者代表 伊藤様** 先月、佐藤先生からシンポジウムに来れば、ふくろう会の皆さんが、縄文をどのように考え、どう思っているか分りますといわれ、楽しみにしていました。やっとふくろう会と縄文が少し繋がりました。これは何回も開かれていくと思うのですが、その都度、僕も参加させていただいて、僕なりの考えが言えるような立場になれるように頑張っていきたいと思います。

・**厚木市からご夫妻で参加 岩藤様** 本当の生き方は人を引き寄せるし、モノも含めて集まってくると思いました。本物の生き方は、今あるものを利用し、自分の希望を実現していくんだという話もありました。今は時代の変革期にあるという話もございましたが、もっと心を見直して、私自身もまもなく定年を迎える状況ですので、第二の人生に豊かさを求めて生きたい。ふくろう会の行事や豊実の実践活動は、私を惹きつけてくれてありがたいと思っております。

・**三川村村議会議員 神田様** 三川村最後の基盤整備の地域の話なんですが、広範囲にわたって遺跡が出ました。遺跡発掘の調査費用も地元で出さなければならぬし、何億円もかかるということで基盤整備がパーになってしまいました。今の人間の生活と遺跡とどちらが大事だということで、遺跡というものに腹立たしさを覚えておりました。そんな中で、縄文時代を見直そうという話を伺いました。平和で争いのなかった縄文時代から、弥生になってコメづくりを始めて、食生活が豊かになった反面、貧富の差や力による略奪の方向に流れてしまった。

縄文に返れ、古典に返れ、原始に返れということは、そうした精神を見失うなどという戒めだと思います。あと半年で阿賀町になりますが、争いのない新しい町づくりのために努力したいと思います。

**佐藤賢太郎** 「縄文の風シンポジウム」を自分たちの手で立ち上げ、地元の皆様を交えて楽しく開催できたことに感謝です。「第一回縄文の風シンポジウム」と題しましたが、次もありますという意味です。学者先生や著名人が縄文について話していますが、もう一つ庶民生活に通訳できているものがないと感じています。

来年はテーマの切り口を変え、引き続き学術的な面というよりも私たちの生活に結び付けて考えるシンポジウムをポイントにおいて開催してまいります。長時間にわたり、ご静聴ありがとうございました。

(完)

発行日 平成16年(2004)12月8日

企画・監修 佐藤賢太郎

収録・編集 御沓一敏

## 第2回 縄文の風シンポジウム

### 第1部 パネルディスカッション

佐藤賢太郎 今日、「葦・銀河」のオープンに際しまして、縄文に詳しい方ばかりに集まっていただきました。こうした方々にパネラーとして参加していただけることはありがたいことです。それでは最初に、「争いのなかった1万年の生活」について福島県立博物館学芸員の森幸彦さんからお願いします。

#### 1 なぜ1万年にわたって戦争がなかったのか

森幸彦 戦前は、どういう教育がなされていたかというところから、天孫降臨とあって、神様が下りてきて、その子孫が我われだと教えてくれました。我われは神様の末裔だったわけですが、戦後になったらそれは違うだろうとアメリカに言われて、「はい、それは違います」となったのです。よくよく調べてみると、縄文時代というのが弥生時代の前にあって、さらに旧石器時代というのがあって、捏造問題の前は100万年も前に、日本列島に人が住んでいたと言ったんです。しかし、それがボコボコになりまして、今は、一番古く日本列島に住んだ人類は、20万年前までは確認されています。1万2000年くらい前に縄文時代というのが始まっています。そして弥生時代に至り、米をつくりはじめます。その縄文時代の人骨が遺跡から発掘されることがありますけれど、その人骨を調べてみるとほとんどが人為的な傷というのを受けた痕跡がない。自然に病気で死んでいるというのが多い。弥生時代の人骨を見ると、特に西日本のものは鍬が刺さっていたり、斧で頭をかち割られていたり、という人骨が出てくる。そのころから、どうも戦争というのが始まったんじゃないかと言われている。

それではなぜ、縄文時代にはなかったか。その違いは米なんです。米をつくるようになって、蓄えができるようになる。そうすると、それを蓄えている人間が貸し出せる。種もみをもっていけば、それを貸し出して田んぼで稲をつかったものを巻き上げる。それで利子をとる。今の銀行みたいなものです。そういう者がどんどんお金を増やしていく。お米を持っている人間が力を持つわけです。そうすると、田んぼが欲しくなる。いっぱいあれば、いっぱい支配していけるわけです。そうすると、隣の家でも田んぼをつくっているっていうと、それが欲しくなる。相手のモノが欲しくなる場所に争いというのが起きてくる。相手をボコボコにすれば、「はい、それ俺のもの」という具合に、どんどん増やして行ってこのあたりの土地を支配していくわけです。会津盆地等もそうやって、ある三つのグループを古墳時代に支配するようになる。どんどん権力を持った人たちが権力を示すために、大きなお墓をつくるわけです。そ

れが古墳というもので、その大きなお墓をつくったところを古墳時代といいます。古墳時代には、大きな単位で争うようになります。その中で、力を持ってきたのが大和朝廷、大和王権です。それがどんどん後世に残って行って天皇家につながっていくわけです。つまり、戦争というのは、相手のものを欲しがるから起きるわけです。

ではなぜ、縄文人は欲しがらなかったか。縄文人というのは、命を奪ったとしても、命というものが蘇ってくるものだと考える。だから誰かの命を奪っても、すぐに蘇ってくるから全然利益にならないわけです。そう考えれば、争う必要もない。相手の物を奪っても、次に生まれてきた命が自分からそれを奪っていくわけですから、そんな無駄なことはしない。そんな風に命が蘇るものと考えていたのではないかというのが私の考え方、そして、縄文の遺跡から出てきたものから学んだことです。

ではなぜ、そのような考え方ができるのかというのを説明するためには、縄文土器を見なければならぬ。ここにあるのは、隣に座っている佐藤光義さんがつくられたものですけれども、本物とほぼ近い形につくられています。なぜ、こういう土器をつくるのか、何をやるものかという、皆さんご存じの通り、煮炊きをするもの、鍋ですね。では、土器の中に何を入れるか。自然の命をすべて奪ってきて、その中に入れるわけです。植物や動物や魚介類、そういうものの命をみんな奪ってきてこの中に入れる。その中に水を張るわけです。

水の中は死の世界です。命を奪ったから、これを生に変えないと、人間は生きていけない。それを食っていくわけですから、死んだものを食っても生きていけない。それでもう一度、生に転換していかなければならない。そうするには、火の魔法をかけるわけです。ボンボン火を燃やす。だんだん中の水が温まってくる。ポコポコ、ポコポコッと煮立ってくる。その「ポコッ」という音は息を吹き返す音なのです。死んだものたちが、この土器の中で生を得て息を吹き返す。そして、ポコポコ煮立ったところでオノゴロ、オノゴロとかき回す。これもまた、大事な作業です。その結果、この中からは、死から生へ転換した料理というものが出来るわけです。その料理は、人間が生きていくエネルギーに代わっていくわけです。それゆえ、その装置としてちゃんと機能を果たすような呪文がなければならぬ。その呪文が、ここに描かれる文様だと思います。弥生時代まで、この辺りの地域の土器は、みんな文様があります。渦巻を中心とした文様です。

ところが古墳時代になると、バッタリ文様がなくなる。それは、土器自体に死から生へ転換させる装置という意識を感じなくなる。そういうことは同でもよい。合理的に、これはただ、煮炊きするものだと考えた方が良いでしょう。

そんな人々が蘇ってきたら支配する人たちにとって大変ですから、だから土器はただの鍋でしかない。古墳時代以降、現代まで考えればそうなる。

縄文時代から弥生時代の初めまでの人たちというのは、土器は全部、蘇るもの、命を生み出すものと考えた。そこに表された呪文ですが、どんな呪文が描かれていたかということ、必ず上、真ん中、下と模様が分かれる。これはさっき下で阿賀野川を見て、向こうの西にある山を見ました。まさに土器そのものでした。水の中は、植物の生えない死の世界です。そこから山があって、そこに湧き立つ植物群があるわけです。燃えています。山は天に向かって極めて命を伸ばそうという、そんな景色がここにあります。

これと同じように、下は死の世界、そして生の世界が真ん中、さらに天へとつながる世界が上。これは、死から生へ転換する装置と申しあげましたから、それを必ず繋げなければならない。繋げるものは何かということ、この火焰土器といわれるものはX字状の橋のようなものがくっつくのです。下の死の世界、上の生の世界、これを橋渡しする役割、それから天へと橋渡しするモチーフが必ず描かれている。それは、元をただと何かということ、長野の土器に非常に具体的なものが描かれている。それは蛙だったり、蛇だったりするわけです。蛙というのは、水の中にも住める。そして陸にも上がる。ずーっと天を見て、月を見て生殖活動をするわけです。死の世界である水から生の世界である陸を行き来することができるということは、それに魂を乗っければ、生の世界へ転換させることができる。そんな風に考えて、長野の縄文人は蛙をべたっと土器の頭に描く。それが、魚沼から新潟、この辺り、会津へと入ってくる。その間に、蛙が両手両足を伸ばして、張り付いたものが、橋というかX字のモチーフに代わっていく。そういうことが土器の中で象徴されている。そこに気づけば、文様全体を理解していくことが出来る。死の世界を象徴するもの、生の世界で展開される事象が描かれている。そしてそれらを繋ぐもの。

ところで、左側にあるのが火焰型土器と言われるものです。右側にあるのが東北地方でよく見られるものですが、こちらに橋渡しの役割を果たすモチーフはありません。何が描かれているかということ、ここが縄文土器の一番の秘密です。というか、私たちが縄文、縄文と語っている本当の意味の縄文の心がある。それは何かということ、土器に描く縄を転がした文様、これが全体にある。蛙の代わりにしているのが縄です。世界をつなぐのが縄なのです。それが縄文時代を通じて、縄文早期から晩期まで、1万年間ずーっと、土器の表面に描かれ続ける。つまり縄こそが縄文人が本当の意味でここに描こうとした役割を担うものなのです。ある世界とある世界を結び付けるもの、それが縄文土器の一番の文様のキーワードだったわけです。死の世界と生の世界を結び付けて

いく、あるいは、ある世界とある世界を結び付けていく。

おそらく、この「葦・銀河」(縄文館)はそういう役割をする。佐藤賢太郎さんもそういう役割をするのだと思う。みんな、縄の役割をしている。あるいは、ある世界とある世界を繋げる。そして、その生き方こそ、我われ現代人は学ばなければならない。一人ひとりに課せられた役割、それは誰にも出来ないことです。あるものとあるものを結び付ける役割というのは自分にしか出来ない。それが、縄文人の生き方を今、学ぶところなんだろうなと思います。

佐藤賢太郎 ありがとうございます。後ほど、皆さんからの質問をお受けしながら、またお話をさせていただきたいと思います。続いて、土器の復元に関して第一人者といわれている佐藤光義さんをお願いいたします。「葦・銀河」(縄文館)の立派な火焰土器のレプリカは、すべてお貸りしているものです。

## 2 必要な分だけ、自然の恵みをいただく生活

佐藤光義 豊実より少し上流の西会津町の佐藤光義でございます。「必要な分だけ収穫した縄文人」ということで、お話しろということでございますが、私は話をするのが専門ではございません。日本各地の山をほとんど上り、鉄砲を担いであちこち行っていますけど、縄文時代まではなかなか辿り着くことができませんでしたので、発掘された動植物の骨・胡桃・トチ・どんぐり等、そうして出てきたものとか、世界の民族例をもとに、私のわかる範囲でお話ししたいと思います。

今からおおよそ1万3000年前、寒冷な氷河期から温暖化に向かい始めた頃、火にかけても、水を入れても壊れない土器の発明によりまして、それ以前の旧石器時代のように毎日、雨の日も風の日も、幼子を連れて食料を求めて歩く時代とは異なり、岩陰や洞窟に定住しながら食料を確保することができるようになったと思います。一つのところにいて生活できるようになる要因といえますのは、土器の作成と使用であります。

縄文土器の使用と申しますと、煮炊き用です。それによりまして、今まで食べることのできなかった食料、植物の粹が衝撃的に拡大していきます。縄文早期になりますと、今までの陸の植物、動物あるいは魚介類というものから目を海にむけまして、食料の増加はさらに拡大してまいります。縄文早期になりますと、どんぐりの高度利用が始まり、縄文中期には、非常に難しいトチのあく抜き技法が加わりまして、寒く長い冬の食料も安定してまいります。どんぐりとかトチの実というのは、1メートルくらいの深い貯蔵穴を掘りまして、その中に蓄えて冬季間の食料とするわけです。



縄文時代には、労働というものがどうゆうものであったかということ、少しお話をさせていただきます。私も学生時代には、狩猟採集の経済社会というのは、常にすきっ腹を抱えて毎日、さまよっていたというような教え方をされておりました。このイメージが新しく見直されたのは、ごく最近のことです。もちろん、縄文時代の労働に関する資料を探しても、どこにも見当たりませんが、アフリカやオーストラリアの狩猟採集民族の研究結果、ブッシュマンと一緒に生活をされた方のお話によりますと、むしろ農耕民族よりも、栄養バランスは良かったとあります。

労働時間についても、農耕民に対して、余裕は狩猟採集民の方が多く、一日2～3時間、あるいは4～5時間で、二日分のビタミンやミネラルが確保できたそうです。その残りの時間は、おしゃべりと昼寝とゲームに興じたそうです。

ゲームとは何かというと、ほとんどがギャンブルだそうです。したがって狩りに出て、獲物がなくても平然と戻って、次の機会を見て出かけるというように、精神的な余裕もあったといわれております。

仕事の分担につきましては、狩りは男性。川の鮭・マスは網で取ります。獲った鮭・マスは腹を割いて、加工して、燻製にしたり、天日干しにしたりする作業が加わりますので、男女協働です。植物採取は女性の仕事だった。そんな風に役割分担がなされていたと考えられております。

縄文時代の食料に対する知識については、どの程度のものであったかと言いますと、縄文時代には、多種多様の食料を採取したといっても、ただ単にやみくもに当ての無い動きをしたのではなく、動物、植物、魚介類に対して、それぞれの生態的な条件と基本的な知識がなければならぬこととあります。私は隣の西会津町に住んでおりますが、こぶしの花の咲くころには、山はゼンマイが盛りになります。また、佐賀県の唐津地方では、鬼百合の咲くときには雲丹が獲れる。ということは、雲丹は海に一年中ありますが、単に獲っても中が空では何にもなりません。その季節になると、卵をいっぱい抱いた雲丹が獲れるということです。佐渡地方では藤の花と鯛、藤の花の咲くときには、鯛が海岸の砂利に卵をすりに来るそうです。

桜の花と山百合と鮎といったように、里にいても海の獲物のことを知ることができたわけです。これらのことは縄文時代からの知識であります。まさに、「必要な量を必要なときに採集できる生活」を送っていたわけでありまして。これは縄文人の食に対する知識が生み出した縄文カレンダーということに他なりません。縄文カレンダーは初めて耳にしたという方もあるかもしれませんが、新潟歴史博物館館長の小林先生が、こういうカレンダーをつくっていらっしゃいます。

しかし、これらのことは、弥生時代以降忘れ去られまして、ようやく寛政 12

年（1800）に山形県の米沢藩では、食べ物の本として23書、編集しております。非常用の植物・食料として、山野のもの268種、海藻類16種、キノコ類121種など武士から農民までもが、縄文時代のように多種多様な植物・食料に対する知識が失われてしまい、特定の植物に頼った結果であろうと思います。縄文時代のようにいつ、どこに行ったら、何が取れるという知識が失われ、現代のように山菜ブームが来れば、すべて取り去り、野草ブームが来れば、根こそぎ持ち去るといった様とは大きな違いであります。

また、私どもが毎日使用しております紙の原料を確保するため、森も山も丸坊主であります。本当に無残な姿です。その材料であるチップを出すために建設機械を使って、山にジグザグの運搬用の道路をつくります。そうすると、雨あるいは雪解け水によって、川のように流れ、山はやがて崩壊してしまいます。まさに、自然破壊そのものです。

今、我われはもう一度、自然との対話について考える時期ではないでしょうか。

佐藤賢太郎 ありがとうございます。それでは最後に、詩人・俳人、友禅絵師でもある十日町石彫シンポジウム実行委員長の山崎巖さんに、大変難しい「魂の観念」をテーマにお願いいたします。

### 3 すべての魂が存在する観念の生活

山崎 巖 十日町石彫シンポジウムは今年が11周年です。佐藤さんから一昨年、立派な石彫をつくっていただきました。さらに、節目の昨年はシンポジウムのメインパネラーになっていただき、大変勉強になりました。

私は、縄文時代は神を中心に考えていたと思います。この土器を中から見ますと魚になっているんです。こちらから見ると鶏（獣）のように見えます。この間に波がありまして、明らかに、魚は波の上であって、獣は波から外れるということで、結論から言うと、縄文人というのは、あらゆるものに神様が宿っている、食べ物もあらゆる植物、生物をいただきますということで、人間が命をいただいているわけですが、そういう意味において、おそらく神を祀っているのではないかと解釈しております。

今日行ってきた屋敷島遺跡から、ちょうど阿賀野川が見えまして、さざなみが立っております。そのことから、土器の中間は波であろう。その下は地下に入っているから、地下のものを表しているのであろう。確かに蛙のようにも見えますし、いろいろなものに見えますが、そういう風な考え方でとらえております。

縄文人が信じていたのは多神教である。あらゆるものの命をいただいて、我

われは生きている。あらゆるものに神が宿っている、という考え方で物事を見ている。仏教にしても、キリスト教、マホメット教にしても、皆一神教なのです。その辺が、縄文時代と今日の私たちとは違うという気がします。今、求めなければならないのは、それぞれの命あるものをいただいているわけですから、あらゆる物を大切にしていこうということを縄文から学び、現代を見直すということが必要なことではないでしょうか。十日町シンポジウムで申しますと、これは一つの過程です。現在進行形なんです。

ガウディという作家がいますが、いまだに教会をつくっていて、ガウディが死んでも、他の人たちが引き継いで、一生懸命つくっている。それを世界の人たちが観に来ている。そういう意味で十日町シンポジウムも進行中ですが、それをだんだん広げていくことによって人が集まる。まさに、佐藤さんがやっていることも、これからどうなるかということが一番大事な気がします。そういう点で、縄文を中心にもっていくことが、これからの21世紀には意味があることのように思います。

**佐藤賢太郎** ありがとうございます。それでは、専門的視点での縄文というだけでなく、生活に結び付けた発想からでも結構です。皆さんから出していただいて、パネラーの方にお答えいただけてまいります。

**Aさん** 縄文の前期、中期では、現在と比較して人口密度は、どんな状況でしたか。

**森幸彦** 試算した人もいますが、明確な数字は出ません。なぜかというと、遺跡の数が同時期にどのくらいあったかというのが把握しきれない。大雑把に言って、私の学生時代、20年前のもの本によりますと、全国の人口は30万人くらいだったと書かれております。今、1億3千万人ですから、かなり少ないですね。

**Bさん** 土器は鍋だったということですし、大きいものから小さいものまであったようですが、家族に一個ずつ持っていたのかどうか、また、自分の家族でつくっていたのかどうか。どういう風に使っていたのでしょうか。

**佐藤光義** 私は「土器づくり教室」を開いていますが、実際に肉を入れて、そこに参加された人たちにご馳走しました。大きい方の鍋では、発砲スチロール製のどんぶりで100人分は取れます。ただ、動物の骨とか、その他諸々が入っておれば、はっきりとしたことは言えません。

会津地方特に、西会津、柳津、あるいは会津盆地辺りの土器というのは大きいです。早期になりますと、土を掘った竪穴式住居になりますので、家の中で土器の中にもものを入れて朝から晩まで火を焚いても沸騰しません。しかし、発

掘調査しますと、家の中から土器も出ます。一度沸騰させたものを、家の中で温めて小さな土器で食事をとることはできます。いろんな用途によって、数もあってのではないかと思います。

私は、煮炊きを本当にするのは屋外だろうと思います。最初から水を入れ、具を入れて火を焚けば、1～2時間で沸騰すると思うかもしれませんが、それ以上の時間がかかります。その代わりに、いったん煮えると冷めにくいです。

**佐藤賢太郎** 大きな土器は100人分取れるということですから、一家にひとつはなかったようです。小さな土器は、食事を分けて温めるのに使われたようです。次の方どうぞ。

**Cさん** 土器について、大変興味深いお話を伺いました。土偶については先生方は、どのようにお考えでしょう。

**森幸彦** 先ほど、舌足らずであったところを捕捉させていただきます。土器自体が死から生へ転換すると申し上げましたが、つまり命を生み出すものです。命を生み出すものとは、女性の方々です。女性のお腹と同じなんです。子宮だと縄文人は考えていたんです。それで、赤ちゃんから7歳ぐらいまでに死んだ子供は皆、土器の中に入れて埋葬する。三内丸山にももの凄く多くの埋嚢、土器を棺にしたものがあるのです。三内丸山のように墓地にしているところもあります。住居の中は男性の領域と女性の領域に別れていたのですが、女性の領域側に埋めてあるわけです。このように土器とは、煮炊きをするだけのものではなく、命を生み出すもの、母親のお腹という意識を持っていたと思います。

そして土偶というのは、99%女性で、しかも妊娠女性を表しています。これから命を生み出すというパワーに溢れている。それで、どのようなお祭りをするかということ、おそらく、土偶をつくってお祈りをして、もの凄いパワーで気を集める。土器に気が満ち満ちたときに、スパーンと壊してしまう。壊して満ち満ちたパワーは、ドット四方八方に散っていく。その壊れた破片は大地に撒く。すると、命を生み出すパワーが大地に宿るわけです。土偶というのも、命を生み出すためにパワーを与えるための精神的な道具であると、私は考えています。

**山崎巖** 土偶の場合には、森さんがお話しされたように、女性のお腹を切ってそのような儀式を行ったであろうということについては、同感でございます。

**Dさん** 私は縄文の土器・土偶以上に、人間に興味があります。縄文人が日本人の祖先であるというなら、縄文人はどこから来たのでしょうか。

**森幸彦** 私はどちらかということ、科学的に考えたいと思います。やはり、猿人

から原人、旧人から新人と発展したと想定しています。縄文人がどこから来たかということ、形質、その骨を計測したのを見て考えます。人類はアフリカ大陸で生まれまして、そこを出ます。インドネシアにスンダランドというところがありますが、そのあたりで一時落ち着く。そこからモンゴリアンという形質がヨーロッパに行った人たちとかなり異なる集団が、北へどんどん生活領域を広げていきます。その過程で、日本列島に着いたのが縄文人の祖先であろうといわれています。

そしてその時、もっと北へ行った人たちがいます。シベリアとかバイカル湖沿岸を中心に生活者していた人たちは、より寒いところに行ったので、体温が発散されないように、身体を守らなければならない。顔は脂肪を付けなければならないので、のぺーとした顔になる。手足も胴長、短足です。ずんぐりむっくりになってしまう。そういう人たちが今度、稲作文化を朝鮮半島で習得して、大陸から追われたのか、出てきたのか分かりませんが、北九州に入る。その人たちが南方系のごつごつした顔の縄文人たちが住んでいるところに入ってくる。北九州から畿内に移ってきて稲作文化を広め、西と東に広がって行って混血が起きる。縄文人の子孫たちと混血が起きて、現代日本人が形成されるというのがストーリーではないかと思っております。

ですから、アイヌの方々から沖縄の方々というのは、割りとゴツゴツした顔で、大阪の人たちは、割とノッペリとした顔の方が多いわけです。ただ、只見地区とか、この辺りは、割とゴツゴツした顔の方が多いんです。それは、あまり混血が進まなかったからです。あの弥生文化を持ってきた人たちと、混血しないので、会津の山の中には、縄文人の血をすんなり受け継いでいる方がけっこういらっしゃると思います（笑い）。

**Eさん** 私たちの子供の頃に、こういう歴史の話をしていただければ楽しかった。

**佐藤賢太郎** そうですね、縄文人は日本人じゃない。恥ずかしいと思って隠していたのではないかと思うくらい、教科書は教えていないですね。今回のシンポジウムのテーマは、「今の時代を見つめなす」です。縄文人から学ばなくてはいけないし、さらにシンポジウムを続けなければならないと考えております。

**Fさん** 先ほど見せていただいたスケールで、縄文が1万年続いたことは分かりました。森先生のお話では、生と死をつなぐモチーフが縄ということですが、そのことが、1万年間、争いがなかったことと結びつかないのですが、。

**佐藤賢太郎** もちろん、縄文人が書いたものがあるわけではなく、森先生はご自分のイメージを膨らませながら、言っているわけですから。何かヒントになるようなものがあるのでしょうか。

**森幸彦** 縄に結び付けた話というのは、おそらく、日本中の考古学をやる人の中で、私だけだと思います。思い付きなので、間違いの可能性も高いです。私たちは土器に触れ、モノが何を語っているかを探るのが仕事です。そうすると、長い時間をなぜ、縄文時代というのか？ その定義は、この長い時間に縄文土器をつくっていたから縄文時代と呼ぶというのが、偉い学者さんたちが言った時代区分なのです。縄文土器がつくられていたから縄文時代というのは、縄文時代の秘密は縄文土器にあるはずです。なぜ、同じような土器を何万年も作り続けていたのか、縄にこそ縄文人の思いがあったはずだ。そんな風に思ってきたわけです。

**山崎巖** 先ほどの続きですが、弥生の人たちが、北九州や大和に来ましたね、そして北海道のアイヌの人たちや沖縄のたちに縄文人を追いやったと解釈すると、非常に面白く解決できるのではないかと考えています。そして、沖縄の人たちや北海道の縄文の顔をした人たちが、戦争を非常に嫌うのは、そこに縄文人の哲学があったのではないかと考えています。

私は、縄はあまり関係ないような気がします。縄文と縄という解釈は、いかがなものでしょうか。

**Gさん** 私も縄文人というのは、猿のような人だと思っていました。三内丸山遺跡に二度行って非常に疑問を感じました。胎児だけが小さな壺に入っているでしょう。あれは人口調節したのではないか？ そうでなければ、戦争もしないで平和であったら、これだけの間に、もっと人口が増えたのではないのでしょうか。

**佐藤光義** 縄文人の寿命というのは、30～33歳といわれています。10代、それも前半で結婚して子づくりしないと間に合わないわけで、江戸や明治時代のような間引きをするほど、果たして、人口があったかどうか、。

**佐藤賢太郎** いろいろな方が、いろいろな考え方を持って、意見を言うことが大切だと思います。ありがたいことに、ここにいらっしゃる森さんは考古学が専門です。だからといって俺の言うことが正しいとは言わない。だから、ここにいられるわけです（笑い）。

**Hさん** 1万年も平和であったということが、なかなか信じられないのですが、宗教的な影響があるのか？ どうやって、まとめたのでしょうか。

**山崎巖** 俺が俺がという、王様のような存在はいなかったのではないかとみられています。

**Gさん** 日本列島に一番争いがなかった理由は、多神教で八百万の神様、すべてのものが神様であるという考え、自然の恵み、すべてに感謝して生きていた、桃源郷であったという説は成り立ちませんか？

**森幸彦** 基本的には、その通りだと私も思います。ただ、精神的な面は、物から拾っていくことができない部分が多いのです。ですから、考古学から言えない部分が多いわけです。司会者がおっしゃるように、その点を皆で考えていこうという、それこそが、我われがこれからやっていかなければならないことだと思います。

**佐藤賢太郎** 今日は地元の人にも参加していただいています。感想でも結構です。どうぞ。

**Mさん** 佐藤賢太郎先生の発想が素晴らしいということもありますが、パネラーの皆さまが高邁な知識と長い経験を踏まえ、お集まりいただけただけということは、それだけでも地元としては光栄です。こういう機会に恵まれましたことを感謝しております。

**県議会議員 澤野さま** 7～8年前から阿賀野川で建設省の地域づくりの話があります。豊実地域が県境になり、下流を阿賀野川、上流を阿賀川と言います。アガというのは、縄文時代から続く由緒ある名称なのです。その川があって、なぜ行政境があるかという問題があります。昔、この辺りは会津藩だったわけです。人が介在することによって、行政の問題が出てきます。

先ほど来の話から、縄文時代は1万年も争いがなかったということですが、確かに縄文時代は、そういう地域であったと思います。したがって、こちらにお出でいただいたときは、行政とか地域とかということをお忘れいただきたい。それが、今日のシンポジウムを開催していただいた一番の成果ではないかと思えます。

**佐藤賢太郎** 蔵・銀河（縄文館）をつくるにあたって、柳津のNさんには大変お世話になりました。自分は縄文土器を持っているからあげるというわけです。

**Nさん** 村の集落から出たものを拾って持っておりました。自分一人で資料館はできませんので、全部、佐藤さんに差し上げました。本当は、私の名前は出して欲しくなかったんですが（笑い）、…。これは全部、拾得物です。本当は警察に届け、6か月間保管されます。当然、所有者はあらわれませんので、貰えるんです。そして、どこから拾ったかだけは記録に残しておいてください。それがないと、資料的価値もないし、流れてしまいます。

**佐藤賢太郎** 土器を拾っても罪にならないそうです。ぜひ良いものがありましたら、ご提供願いたいと思います。

さて、結論は出ませんでした。皆さんも関心を持っていただきましたように、1万年も長い間、なぜ平和が続いたのかという素朴な質問。なぜ、あんなものを

つくったんだろうかという質問。そして、こんな過疎の豊実にすでに、5000年前に人が住んでいたということに疑問を持つことも大事なことです。ここにお出でいただいた方を見ても、北海道から、福島、新潟、九州まで、本当にさまざまの方にお集まりいただいていることも、面白いことだなと思います。

テーマの“魂の存在”については殆んど話されませんでしたし、深く入っておりません。例えば、仏様や先祖の前で、なぜ、手を合わせるのかということ一つ取り上げて、そこへ繋がっていきます。そういうことすら考えなくなった現在だなと思いますとき、一つのテーマだけでも話は進んでいきます。

今日は、縄文に大変詳しい方々お出でいただきながら、時間の制約上、十分に発表していただくことは出来ませんでした。皆さんから、これだけの反応があっただけでも、ありがたいなと思っていただいて、ご容赦いただきたいと思います。長い間、誠にありがとうございました。

(完)

発行日 平成18年(2006)1月28日

企画・監修 佐藤賢太郎

収録・編集 御沓一敏



## 第3回 縄文の風シンポジウム

### 第1部 縄文人は定住生活をしていたか

佐藤賢太郎 第3回目の縄文の風シンポジウムを、これから始めさせていただきたいと思います。縄文人の生き方から、今の時代を見つめなおすという大きなテーマでやっていこうと思います。

私は作品に縄文のモニュメントを取り入れてみようと思って調べ始めたら、とっても面白くなってきまして、仲間と一緒に縄文シンポジウムをやってみようということで、3年前から始めたわけです。

縄文時代というのは、1万2千年前から続いてきた私たち祖先の生き方ですね。そんな前から、日本人が素晴らしい生き方をしていたのかということに驚きまして、だんだんと仲間も縄文に関心を持つようになってきました。

そこで今年は、2006年縄文シンポジウムのテーマとして、一つは「縄文人は定住していたのか?」、あるいはどこかに移住して暮らしていたのか、ということを考えてみたいと思いました。そして、大きく分けて二つ目に「再生の観念」というものを考えてみたいなと思いました。

今年は、昨年に続きましてパネラーとして福島県立博物館の学芸員である森幸彦さんにお出でいただきました。大変ユニークな方で、またお話ししやすい方です。西会津芸術村とも関係がありまして、昨年、西会津芸術村で招待アーティストの展覧会の時、私がたまたま行ったら森幸彦さんと出会いました。縄文シンポジウムをやっていることをお話ししたら、大変関心を持ってくださり、仕事を休んででもこちらに来てくださるというぐらい熱心に参加してくださいました。

そういうわけで、昨年の縄文シンポジウムを開催することが出来ました。

今年も、冬の間からメールで質問しました。質問に答えていただきまして、ずーと準備しながら、今年はこのテーマにしようということになりました。一つのテーマに対して、それぞれ違う意見を出しながら、自由に討論していこうというのがシンポジウムです。あくまで、学術的というよりも生活に密着した縄文人の考え方で、ずーとやっていきたいと思っております。

縄文人は、定住生活をしていたかということですが、なぜこのテーマを選んだかということ、今までは雪の少ない埼玉にいて、たまに帰ってきてはいましたが、40年ぶりに帰郷して、雪の生活、雪下ろしをやってみて、いやになるほど大変な思いをしました。阿部公房の「砂の女」のように、砂の代わりに雪がどんどん入ってきて、どかさないと死んでしまうと感じたとき、縄文人が1万2千年前から、本当に定住していたのかなという疑問が湧き、こちらにいらっしゃる森幸彦

さんにお聞きしてみたわけです。

**森幸彦** 福島県立博物館の森幸彦と申します。ここ豊実江戸時代は会津領です。基本的には会津の文化圏の中で生活してきたでしょうし、今も、新潟県が相手にしてくれない地域だと思っんです。むしろ西会津町の方に、とっても親しみを感じるのではないかと思いますし、同じような生活をしていると思っんです。やはり、雪が多いのが特徴でもあり、皆さんが困るところでもある。しかし、西会津や豊実、阿賀町という雪の多いところに、なぜ皆さん住んでいるのでしょうか。その点が、縄文人が定住していたか、していなかったかを解き明かすヒントになるかもしれません。基本的には、自分の土地、田んぼ、畑を守るがために、皆さんは今も住んでいると思っんです。それは、江戸時代を通じて会津藩に、決められたエリアの中に住めと言われたからかということ、そういうわけではないんです。居たくなければ、逃げ出せばいいわけですから。

ただ、どこに逃げるかということ、どこも他の人が土地を所有しているわけですから、行く場所がない。日本の国土の中で、逃げていかざるを得なかった人たちが、歴史の中で求めたのは、蝦夷地とか北海道のさらに苦しい生活を強られる道しかなかったのです。そんなことを思うと、やっぱりこの土地がいいから住んでいるんですね。

縄文人も、同じだったのではないのでしょうか。この雪があるから水がある。雪がなければ枯れた土地です。水がなければ、一年中生活できない。田んぼも畑もつぐれない。この雪が、一連の生活を支えてくれているんです。阿賀野川の上流から下流に至るまで、雪解け水を利用して、一年の生活サイクルがあるというわけですね。

縄文人は、その土地でなる木の実を食べ、生活していくわけですね。縄文の遺跡を調べ、土器を見れば、大体何年くらい住んだかということは分かります。毎日使う器ですから、必ず飽きが来ます。皆さんの毎日使うご飯茶碗を見てください。割れると次に新しいものをつくります。昔使っていた模様が飽きると、今度はこっちの器にしてみようとなります。社会全体が飽きてくると、作り手の方も「こんなのどう？」と新しいものを提供していくわけですね。流行があるんですね。

このように、土器の模様も必ず変わっていきます。変わっていく年代幅を考えると、大きく変わるのは、100年単位くらいですね。そうすると、その遺跡から出てくる土器で、例えば、新渡大橋をつくったときに発掘した屋敷島遺跡というところは、大体200年くらいは続けて住んでいることが分かります。

これは縄文時代の物差しですね。1メートルが1万年で、10センチが千年ですね。今がここ（右端のゼロポイント）ですから、20センチ左の2千年前が弥生時代という米つくりを始めたところですね。2千300年くらい前から1万2千年前ま

で（左へ23センチから120センチ）これが縄文時代です。このうちの縄文中期の初めころ（左へ48センチ=4千800年前）、このあたりに屋敷島で縄文人が暮らしています。

話がずれますが、この辺りを調べると遺跡がとても少ない。角神あたりは縄文遺跡があります。実川にも一カ所あります。ここ豊実が、全くない。徳澤に行くとあります。なぜかという、まだ調べていないからです。遺跡が見つかるというのは、建物をつくったり、道路をつくったりするときに地面を掘り起こして、たまたま見つかるというケースが多いんです。この辺りは、ほとんど開発されていないんですね。日本で唯一くらい、自然をきっちり残している地域かもしれません。遺跡がまだ地中に眠ったままなんです。ですから、今後必ず見つかります。もっと几帳面に歩いてみてください。畑の下を見て歩いてください。ほんの小さな土器の破片とか、鍬が落ちています。それを拾ったら、そこは遺跡なんです。西会津にはかつて、そういうことに興味のある人が大勢いて、とにかく歩き回っているんです。西会津には、縄文の遺跡が非常に多い。

さて、屋敷島の縄文人たちは数百年続けて住んでいました。その季節ごとに人が移動していたか？ そんなことはない。だって、下流にも住んでいる人がいるんですから。上流にも住んでいる人がいるんですから。雪が深いからといって、西会津に行っても、柳津に行っても、会津盆地へ行っても雪はあるんです。

「おめーらのテリトリー、領域はここだと決めたい、そこがおめーらの生活するところだから、おらさところ入ってくんな！」となるわけです。日本全国に、日本人が住んでいるんです。どこもテリトリーを持っています。そこへ、季節のいい時だけ出かけて、うまいものを食わせろと言っても、これは無理です。飯豊の水が豊かな食物を生む。その豊かな食物が一番あるのがここなんです。山に行けば、ドングリ、栗、トチの実がたくさん採れます。春になれば、山菜が出る。鮭も遡上してくる。山椒魚もいる。特に秋の木の実が大事です。これでほとんど一年間を賄うわけですから。

大量にとったトチの実、どうするんでしょう。冬は暖かいいわきへ行って過ごしますといっても、灰汁抜きをしなければなりません。そのトチの実や一切の生活用品をもって集落ごと移動する、そんなことはあり得ない。やっぱり、この地に蓄えて、少しずつそれを灰汁抜きしながら食用化していく。そして計画的に一年の中で食べていく、そんな生活をしていただんだと思います。

佐藤さんの疑問の出発点は、奥会津書房の『縄文の響き』という本に「雪の時期にはどこかに移り住んだ」と書かれた部分だと思いますが、私はちょっと賛同できない、意見を異にするところなのです。

縄文人はその土地に定住し、その土地を愛し、その土地で命を繋げてきた。そして我われは、その末端にいるんだということ、もっともっと知って誇りにし

て欲しいなと思います。

**佐藤賢太郎** 縄文人が定住していた条件として、食べ物が多くてここが良かったからということと、テリトリーがあるから移動しなかったとおっしゃいましたが、定住していたという証拠は何でしょうか？

**森幸彦** 周りに展示している土器（写真・パネル）は、どれも4千500年前の土器です。新潟、青森、栃木、福島、群馬、山形、あとは長野と山梨が多いです。左は富山の土器です。この辺りは岩手、山形の土器です。土器を開いた形で撮っている展開写真といいます。模様が良く分かると思います。ご覧いただいて分かるように、それぞれの土器の特徴が、その土地、その土地によって違います。

近い遺跡でも、例えば、福島の土器と新潟のこの辺の土器と似てはいるけれど微妙に違うんです。もし同じ人が雪があって寒いから、いわきの太平洋側へ行こうと移動したとしたら、同じ土器が出ないとおかしいんです。ところが、発掘してみると、非常に顔の違う土器が出てくるので、移動というのはいり得ない。そんな風に考えました。

**佐藤賢太郎** 他に疑問に思ったのは建築です。とにかく今でも、雪が降って家が潰れてしまうくらい雪国は大変なんですけど、そのころの縄文人の家というのは丸い円錐形の竪穴式住居ですね。そんなところに住んでいたら、ひとたまりもなく潰れてしまうのではないかと思ったんです。集会所のような大きな建物は別として、一家族5~6人の個人の家が、雪の中でどんな暮らしをしていたんだろうと疑問に思いました。

福島県立博物館へ行ったら、森さんが設計したというデザインで、屋根が尖ったところに中二階があって、暮らしていたんだということも説明してくれました。雪が降れば、現在のような家なら潰れてしまうけど、こうした円錐形の家なら周りが柱になってもたれ合い、むしろ丈夫である。そう言ってくれる方もいますが、だったら雪下ろしをしないで済むなとも思いました。その辺のところをお願いします。

**森幸彦** ちょうど、三角形、円錐形のような家を只見町の会津只見考古館の庭に何棟か復元してあります。毎年、3メートルくらい雪が積もりますが、全然潰れません。まして毎日、そこで暮らしていれば火を焚きます。火を焚けば、なんぼ積もっても、その周りだけは溶けるんです。あと、道は雪を踏んでつくっていくしかありませんが、十分に暮らせませす。

私も、二日以上は寝たことはないんですが、縄文住居の中に何回か寝たことはあります。中は地面を1メートルくらい掘ってあります。ですから、火を焚けば中は非常に暖かいです。昔の人は命がかかっていますから、自分のことは自分で守る。絶対に潰れない家をつくっているんです。

**佐藤賢太郎** 冬に火を焚いているといいますけど、薪小屋は見当たらないですね。

1月から3月まで雪があったとしたら、どこに薪を置いたのでしょうか。

**森幸彦** 縄文住居は円錐形に掘ってありますので、そこに円錐形の屋根をかけると、周囲に空間ができます。そこにともかく1年分の薪を積んでおきました。

これは、白川にマホロンというところがありますが、そこで働いていた時、復元した縄文の竪穴住居で毎日、火を焚きました。昼間だけですから、おそらく縄文人の焚いた火の半分ですが、家の中に積んだ薪で、割と一冬持ちました。

賢太郎さんは、あれは薪小屋ではないと言いますが、そんな証拠もないですよ。薪小屋だったかもしれない（笑い）。特に薪は生活に必要なものなので、どこかにストックされているはず。土の上に直に置くと湿気るので、薪一本分の空間を設けてあとは上へ積み上げていけば、上の方は乾燥します。

**佐藤賢太郎** こんな風に、私も疑問に思うことを質問していったのですが、皆さんの方からも、聞いてみたいことがありましたら、遠慮なくお願いします。

**Aさん** 土器に模様がありますね。芸術的な模様ですが、土器をつくる職人さんはいたのでしょうか。今でいうと分業化というようなことは考えられるのでしょうか。

**森幸彦** おそらく、上手い、下手はあると思います。ただ、下手でも作っています。この辺にあるもの（周囲の縄文土器・パネル）は非常に上手いものが多いです。では具体的に専門集団はいたかという、考古学会の中では、いなかったと考えられています。専門集団は、同じものを繰り返しつくらなければなりません。そういう様子がないんです。一個、一個全部違うんです。

アメリカインディアンにマリアという土器づくりの非常に上手いおばあさんがいました。マリアのつくった土器は、研究者が見ると他の人がつくったものと変わらない。ところが、部族の中ではマリアの土器が一番素晴らしいとなります。非常にマニアックなところで上手さが出るんです。

質問に返ると、割と誰でもつくれたのではないかと思います。

**Bさん** 今まで出ていなかったところでも、この辺は出そうだと絞ることが出来るのでしょうか？ ポイントを教えてください。

**森幸彦** ここは山が迫っていて、川との距離が狭いですよね、地図でしか見ていませんが、この上の学校があるところが平坦になっています。やや広い空間がありますので、そこが遺跡である可能性は高いです。今、集落のある所は多分、川が溢れると沈みます。だから、一段高いところに彼らは住んでいたと思います。

ここは、住めるようになったのはいつかな？ ここは洪水とかありませんか？（ありません）ないですか。なんかよい土地なのかな（ダムができる前は、もっと下の方に川が流れていたと云う話です）。そうすると、段丘の下に遺跡があるかもしれませんね。

5千年前くらいに、今の会津の沼沢沼のあたりに沼沢山があって、大爆発を起こします。そこから噴出された火山灰が会津全土を覆います。雨が降って火山灰は、全部この川に流れ込みます。そして銚子の口で止まります。短い時間ですが、坂下辺りは一時、湖化してしまいます。銚子の口が一気に崩れ、この辺りは大洪水になります。屋敷島を掘ったときも、そのときの火山灰が2メートルくらい堆積していました。

屋敷島の縄文人たちは、食糧を貯える穴をその火山灰の中を掘って行って、フラスコのような形で下を広く掘りますが、火山灰の中で広げると崩れますので、火山灰の層を2メートル掘りぬいて、その下の固い地層部分を広げるという掘り方をしていたのが分かりました。だから、5千年前以前の遺跡は火山灰の下になっているので、殆んど分かりません。それ以降の遺跡ならば、見つかる可能性は高いので、ここも地図上でいうと、菱潟あたりも非常に良い地形を持っています。

「あ、ありますか！」やっぱり拾ったら、教育委員会に届けましょう。そうしないと登録されないんです。新潟県の遺跡地図というのがありますが、この地域の遺跡がすっぽりぬけていたので、どんどん登録して、保護する必要があると思います。

## 第2部 再生の観念

### 1 土偶はなぜつくられたか

佐藤賢太郎 次のテーマは「再生の観念」です。ちょっと難しい感じですが、これに関心を持つに至ったのは、私は彫刻をしておりますので、土偶というものにつきまして関心がありました。方やギリシャではミロのビーナスをつくったのに比べて、若干時期は違いますが、日本はあまりにも不器用で子どものように思われます。でも違うんだ。日本の持つ精神性というものは、ミロのビーナスに出せないようなものがあるのではないか、ということのを思いはじめました。

ハート形土偶、狐の土偶、縄文のビーナスといったものがつくられていますが、なぜこのような土偶がつくられたかということに疑問をもって、森学芸員に訊ねました。

ものの本には、五穀豊穡を願ってとか、病気を治すためと書いてあります。土偶はバラバラに壊れて出てくるのが殆どです。自分の手を怪我したとき、手が治るように、その部分を折って土偶に願いを込めてつくったのではないかとされているので、自分もそうかなと思っていました。ところが、そうではないのではなかということまで話をしてくださいました。そのへんから「再生の観念」ということを考えてみたいと思います。よろしくお願いします。

森幸彦 確かに縄文の解説書を読むと、土偶って何のためにつくられたかとい

う点について、一つは豊穰祈願ですね。ただこれは農業というものを基本としたときにイメージされるものです。農耕をしない縄文時代は、木の実や魚介採集、猟をするという生活ですので、農業と直に結び付けるのはどうかと思います。

土偶の特徴は、オッパイがあってお腹が出ているものが多い。妊娠した女性を表しているのが基本です。そこから、生命を生み出すということと農作物をリンクさせて豊穰を願うという風に考えたのかもしれませんが。

もう一つ、賢太郎さんも触れたように、病気や怪我を治すための身代わりに土偶をつくって、そこを壊すことによって自分が治るという呪術的なことをやっていたのではないかとされています。これはアフリカなどに多いのですが、木の像をつくってブラックマジックのように身代わりにさせるといったものです。

これは学者が発想したもので、どうかなと思います。その理由は、数が少なすぎるんです。そのたびに土偶をつくっていたら、一人で5回病気になったとしても、集落全体では何百回と病気になるわけです。それを何年も繰り返していたら、何千体、何万体という土偶が出ないとおかしいんです。各遺跡でせいぜい三つくらいです。多いところで20個くらい出るところがあります。この数が少ないということが一つのポイントです。

五穀豊穰というのも、ワンサイクル1年ですから、一年に一個はつくらなければならぬ。ところが、その数にしても少なすぎる。百年間続いた遺跡でも、例えば三内丸山で出てきた土偶を全部合わせても、100個に満たないんです。ですから、一年に1回つくるというのも納得できない。

それでは、どう考えようかというところですが、土偶の基本である女性というところに目を向けていきます。女性というのは、これから命を生み出していく存在、その女性の像に願いを込めるわけですから（そうではないかもしれませんが）そう仮定させてください。

これから命を生み出すもの、そしてそれを壊す。必ず壊れて出てきます。ここにも写真があります。一見全部、全部あるように見えますが、右足がないんです。右足だけが欠けています。だから、この像をつくって壊すことに意味があるんです。わざと壊れ易くつくっていることも、最近是指摘されています。この部分を別々につくるんです。ちょっとくっ付けて、周りをべたべたと付けるだけ。X線で撮ると、そんなことが分かってきます。では、なぜ壊すのか？ 破壊によって、命がもたらされるわけです。そこに根っこの考え方があるようです。

これは民俗学の人たち、あるいは歴史学をやっている人たちは古事記や日本書紀の中に書かれている神様と結びつけて考えることもあるようです。

それは天照大神の弟、須佐之男命が天照大神に命じられて、料理を司る神がいるから、そこへ行って飯を食って来いと命じられます。そこへ行くと、オホゲツ

ヒメはブリブリッと身体から食べ物を出したのです。すると、そんな汚いものを食えるかといって、須佐之男命はオホゲツヒメを殺してしまいます。殺したところ目から五穀が出てきたり、お腹から何かが出てきたり、食物が身体から生えてきたという食物の起源説話があります。これと結びつけて、五穀豊穰を願う神様なんだろうと考えてもいるようです。神話にかかわることは、はっきり言って分からないんです。分からないものは分からないんです。あとは推測するしかない。

私はどう考えているかというと、これはやはり、壊されることで命が生まれ出されると思っています。大地に撒かれるんです。穴を掘って埋められるときもありますが、殆ど何の痕跡もないところにポロッと出てきます。大地に撒いた状態で出てくるんです。土偶に命を生み出すパワーを込めてつくり、破壊することでその命を大地に撒く、大地にその命を宿らせる。それが目的だと思います。

何のためかといえば、これは大地の力が弱るからです。それでは、一年に一回の五穀豊穰を願う祭りと同じではないかということになりますが、その数からいうと少な過ぎる。

あとは天体の問題かなと、今は考えています。何年かに一遍、日食か月食、その全ての力が弱ってしまう。そのときに、その力を復活させる役割が土偶にあるのか？ その辺は推測でしかないのですが、天体というものもかかわる大きな再生を願う気持ちが土偶に込められているのではないかと、今のところ思っています。

**佐藤賢太郎** ありがとうございます。土偶がなぜつくられたかということについて、幅広くお話いただいたと思います。

土偶は女性ではないかということですが、小林達雄さんは「土偶を女性と断定してはいけない」といっていますが、どうでしょう？

**森幸彦** 確かに、土偶のすべてが胸もお腹も出ているという訳ではありません。

## 2 死と霊

**佐藤賢太郎** 面白いことに、殺した身体のいろいろなところから食物が出てきたという話がありましたが、そこで、次に続けて再生ということを考えました。死と霊ということから、再生という観念に興味を感じました。

土偶では顔が半分平らであったり、穴があいたりしていますが、ここから霊が入りやすくなっているとか。霊ということになると、迷信ではないかとか思いがちな人もいますが、再生観念を含めて、縄文時代から受け継いでいたものが我われの中にあるのではないかと思うのです。

例えば、正月になると神社へ行きます。それは豊実でも東京でも同じです。でも、なぜ、神社に行くのでしょうか。それは抵抗ないのに、霊の存在というそれ



は可笑しいとか、最近テレビに出ている細木数子を信じて、そちらの方が偉い先生になっている。それは別にしても、今でも、地鎮祭などは行っています。そのように生活ではやっぴながら、別の面では否定しているところがあるなと思います。

縄文人というのは、見えないものを感じる力、現代人にはないそんな力があつたのではないか、そんな風にも感じています。それをどのように確かめたらよいのか考えています。また、赤い櫛にしても深い意味がある。赤と黒があつて、生と死の境を表すと言う人もいる。イヤリングにしても、動植物の声を聞き取り易くするため、これを付けていたと西宮紘さんは言っております。貝殻でつくったブレスレットもたくさんつけている人がいる。あと、刺青ですが、土偶にはいっぱい出てきます。この辺は、再生とか死とか霊というものに関係深いと思います。

また、縄文人は植物や動物と通じ合う能力を持っていたのではないかと、とも思っています。その辺を含めてお話いただければ幸いです。

**森幸彦** 神社でお祓いをするというのは、とても面白いですね。お祓いの最初というのは、オホゲツヒメの話の後に出てきます。天照大神はオホゲツヒメが殺されたので、須佐之男命に対して非常に怒ります。須佐之男命は、その後もいっぱい罪を犯しますが、最後にその罪を洗い流す、つまり禊を行います。水の中に入ることによって、全て罪が消えてしまいます。多分、キリスト教やイスラム教の世界では理解できないことだと思います。水に流せば、すべて消えて、新しく生まれ変わるんだという発想、思想なんです。それは縄文時代以降、我われの中にズーと息づいている考え方だと思います。

縄文人の心は、やはり考古学では解き明かせません。推測にならざるを得ませんが、土偶というのが、再生というものを彼らが考えている一つの証拠と言えるでしょう。

それから、子どものうちに死んだ遺体は、必ず土器の中へ入れて埋葬される。つまり、土器というのは死から生へ転換させるものと考えていくわけです。それも、お母さんが良く通る、女性のエリア内に埋葬する。それによって、その土器に埋葬された子どもの魂が、お母さんが跨いだときに股間からまた、生まれ変わって来ると考えられています。

それから、私が新池町（しんちまち）というところで、貝塚が発掘され、それを検討した結果なんです、100体以上の縄文人骨が出ています。その葬られた頭の向きはある方向に集中するんです。その土地で一番高い山頂に向かっています。死んだ魂というのは山の頂に行くのです。そしてまた、還って来ると考えていたんだと思います。その考えは、今も引き継がれています。例えば、磐梯山の下に縁日寺がありますがそこを中心にハマヤ信仰というのがあります。死んだ魂というのはまず、身近な山へ行つて数十年後、磐梯山の頂上へ行つて、そ

れから天に昇る。それからまた、還ってくる。そんな考え方があるんです。

その境目、生の世界と死の世界は、行ったり来たりしなければならないので、何かで繋げなければならない。おそらく、この辺り（土器の口縁部、突起文様を指して）もそうだと思います。天から魂が降りてくる。ここに宿っていく。ここが境目なんです。境目に何か象徴を置かなければならない。それがこの渦巻になってくるわけです。おそらく、これは蛇だと思いますが、ある世界と、ある世界をつなぐ場所には何か象徴が描かれるのです。

これも縄文土器や土偶を考える意味では、とても重要であるし、境という概念、それは今の私たちの生活にも、折々に現れてきます。峠の道祖神も、境のところで、別の世界と別な世界を繋ぐためにあるのです。

神社というのもそうです。神の世界と人間の世界を繋ぐ。そこに、鳥居が建てられ、神が祀られ、神主さんがいるわけです。祓いというものも、自らを清め、新しく生まれ変わるといえるときは、その境を行き来しなければならない。その行き来するところが神社なのです。

**佐藤賢太郎** 常に再生していくという観念、非常に面白いと思います。話は飛びますが、再生と同じかどうか分かりませんが、人間は死ぬと、次に人間として生まれ変わるかというところではなく、別な動物に生まれ変わったり、男と女が逆転したりすることもあるという人もおります。

かつて私はインドに行って、アグラ城を訪れた時のことですが、観光客は私一人でした。そのお城のてっぺんに一匹の犬がいて、じーと遠くを眺めていました。昔この犬は、人間だったのではないかと思いました。

**森幸彦** 世界的に見ても、ユダヤ教やキリスト教が起こる前、原始的といわれる宗教を見ると、女性を崇めていることが多いんです。女性の命を生み出す力というのは、世界の根本であるという風に考えていたと思います。

最近流行った「ダビンチコード」という小説がありますが、あれはキリスト教以降、政治的な動きをしなければならない、組織化を図るために、男性の力を強めようと、キリストを神に持ち上げたと書いて、バチカンから怒られているわけです。

縄文人というのは、人は人として生まれ変わると思っているのですが、そこに次第に罪の概念のようなものが入ってきます。仏教の考え方がそうですね。餓鬼道に落ちますよとか言って、脅して現世の秩序を守っていく。それを体系的に語るのが、今の仏教、キリスト教、イスラム教ではないかと思います。

今も、イスラエルとレバノンが戦争をやっています。そこに必要となるのは、人を許す気持ち、罪を一回流してしまおう、そして新たに生まれ変わろう、そんな風に考えていくと、戦争もなくなるんだと思います。

その考え方というのは、日本の縄文時代に戻ることもある程度、原点として必

要なのではないかと思えます。これだけの長い間、縄文人が命をつないできて、我われに至っているわけです。我われも、もっとこの長さをこちらへ繋いでいかなければならない。そのためには、お互いに尊敬し合い、また、大切な命をつないでいく柱になっていくことが必要ではないかと思えます。

**佐藤賢太郎** ありがとうございます。今は、利益になるかならないかだけが、一番大きな指針になっている時代で、いろいろな事件が多発しています。やはり、我われは、縄文人から大分学ばなければなりません。今の時代を見直そうというシンポジウムに繋がっていくわけです。皆さんの方からも感想やご意見をどうぞ。

**Cさん** 東京の青梅では、土器があまり丁寧につくられていない。それは、子どもが亡くなってから慌ててつくったからだと聞きました。土器を焼く方法について、また、土器・土偶は男性、女性、どちらがつくったのでしょうか？

**森幸彦** 青梅の方、残念ながら、土器は死んで直ぐつくるということはありません。子どもが埋められている土器を掘り出してみると、煮炊きした痕跡があります。それは使い古していいんです。しかも、魂は埋められて、そのまま出ていかないと困るんです。土器の底とか横に穴をあけて、煮炊きの機能を失わせ、棺として再生するものとして変えてしまいます。土器のつくり方ですが、灰の中というのは、やったことがないので、上手くいくかどうか分かりません。

**Cさん** 瀬戸でも、唐津でも失敗した焼き物の破片の山がありますが、縄文にはそれが無い。高い確率で成功しているのはなぜですか。

**森幸彦** 不思議ですね。私たちも、慣れてはいますが、9割成功、1割は失敗します。特に、新潟の火焰土器なんていうのは、壊さずに焼くってというのは大変なことだと思います。

**Cさん** 灰を使ってやってみると、内側も、外側も均等に水を吸い、温度差も出ないで焼けると思いました。縄文人は灰で焼くことを知っていたのではないかと思いました。あと、縄文人は炭は使っていたのでしょうか。

**森幸彦** 炭はわかりませんが、消し炭みたいなものは残るので、再利用しているとは思いますが。灰についてはトチの灰汁抜きがありますので、灰の重要性ということは熟知しています。

土器はどちらがつくったかという疑問ですが、これは分かっておりません。私の考えだと、男女の役割は明確に分かれていて、弓矢、斧は男性。お墓の副葬品で分かります。土は女性、石は男性という明確な分離もあるようです。土器も命を生み出すものとしては、女性のお腹の中と同じだと認識していますし、子どもも子宮に還すという意味として捉えれば、土器は粘土で作っていることもあるし、非常に女性的だと考えられます。その意味で、土器は女性がつくるんじゃないかと思えます。

**D さん** 森さんは考古学者の枠組みを超えたところでお話をお聞かせいただけますので、いつも楽しみにしております。今の日本は、敗者復活の機会が少ないといわれております。再生というとすごく距離を感じますが、復活という意味では、「洗い流す」というお話は命の話だけでなく、環境も含めて、「今の時代を見つめなおす」というテーマに非常に近づいていくのではないかと思います。

あと、特に船戸地区は遺跡が発見されていません。破片を見つけたら教育委員愛に連絡して下さいということでしたが、そののところが、もう一度お願いします。

**森幸彦** 畑の土器や石器を拾うということは拾得物です。まず、警察に届けます。落とし主の届を待つ期間が半年あります。縄文人から届け出がない場合、警察から渡されます。教育委員会に届けて、どこから出たかを報告する義務はありません。後々のため良いと言うだけです。ただ、お願いがあるのは、どこから出たかだけは、そこに書いておいて下さい。皆さんにも、ぜひ心がけていただきたいと思います。まずは菱潟の登録をしましょう！

**佐藤賢太郎** 長時間ありがとうございました。素人だけで縄文シンポジウムを立ち上げて、こうして三年になりますが、福島県立博物館学芸員の森幸彦さんには大変お世話になりました。パネル等の資料までお持ち下さる熱意、また、私たちの夢を、一緒に応援して下さる姿勢に感謝の言葉もありません。本当にありがとうございました。皆さんとともに御礼申し上げます。

(完)

発行日 平成19年(2007)3月31日

企画・監修 佐藤賢太郎

収録・編集 御沓一敏